

手賀沼が海だったころ

2024年1月14日 当会創立25周年記念 講演とコンサートの集い開催！

間宮正光氏「考古学からみる城のつくり方」講演会
+ 有吉かつこさんのギター弾き語り



1. 当会創立25周年記念イベントとして

当会は1999年9月26日の設立で、今年で創立25周年になります。それを記念して、去る7月14日にアミュゼ柏クリスタルホールにおいて、講演とコンサートの集いを開催しました。

奇しくも、今年は柏市制70周年の年であり、イベントのチラシにも、「柏市制施行70周年記念 当会創立25周年記念」と「記念」二つを併記しました。

当会創立直前の1999年6月13日には歴史シンポジウム「手賀沼が海だった頃—松ヶ崎城と中世の柏北域」が開催されました。が、会設立後には2004年11月28日に「松ヶ崎城と街道(みち)ー中世柏地域の陸上交通」という当会創立5周年記念シンポジウムを開催し、そのパネラーのお一人が今回講師をつとめられた間宮正光氏です。

新型コロナ感染症の感染拡大の影響で、ここ数年は講演会開催を控えたこともありました。

創立25周年という節目の年にあたり、前記イベントを開催することにしました。

2. イベント当日の様子

当日朝はあいにくの雨でしたが、昼からは小ぶりとなりました。当日午後の開場に先立って、受付、会場の題字掲示などの準備を行いました。



＜今回のイベント受付風景＞

まず開会のあいさつを行い、その後有吉かつこさんにギターの弾き語りをしていただきました。

東日本大震災からの復興をテーマとした「春よ来

い」(高橋忠史作詞・作曲)のほか、オリジナル曲中心のギター弾き語りでした。



＜熱唱する有吉さん＞

有吉さんは、別の団体の主催ですが、松ヶ崎城跡で行われた音楽イベントに参加されており、その縁で今回ミニコンサートを行っていただきました。

その後は、間宮正光氏の講演会です。

間宮正光氏の今回のご講演は、「考古学からみる城のつくり方」というテーマで城郭を対象にした中世考古学の内容でした。考古学というと、縄文時代や弥生時代の遺跡を扱うイメージがありますが、中世の遺跡である城郭を考古学の観点からみるという研究もあります。今回は、レジュメ

にある通り、「本日のお話しは、近年蓄積されつつある発掘資料をもとに、土木技術や構造から東葛地域の戦国の城をみるもので。地域ではどのような技術で城が築かれ、そこに独自性はあったのか。城のつくり方を知ると城の魅力が倍増し、地域の歴史がみえてきます」ということで、東葛など各地の城郭の発掘の結果をもとに、中世城郭はどうのようにつくられたかということをテーマにしていました。



＜講演中の間宮正光氏＞

「発掘された東葛の主な戦国の城」として挙げられたのは、小金城、根木内城（以上松戸市）、箕輪城、松ヶ崎城、幸谷城館と増尾城（以上柏市）、法花（華）坊館と根戸城（以上我孫子市）。松ヶ崎城をはじめ、近隣でなじみのあるお城ばかりですが、発掘に関しては、結構知らないこともあったのではないかでしょう

か。高城氏の居城だけあって、小金城跡からは貿易陶磁などが発掘で見つかったのに対し、松ヶ崎城跡からは日常雑器が少数見つかっただけでした。城のつくりでも、各城郭に特徴があり、箕輪城跡にはV字上の深い堀があって、敵の侵入を許さない要塞のようなお城でした。小金城跡、根木内城跡、増尾城跡といった城郭には「虎口」（こぐち）という出入口の横に大きな櫓台状の水平方向に突起した土壘を設ける工夫がされています。これは高城氏に特有な築城技術のようです。一方「松ヶ崎城は、長期間にわたり使用されたのではなく、短期間で終焉を迎える館など居住を前提とする日常生活の場でもなかったのです。規模や土壘をみても、箕輪城などのように、いわゆる要塞として築かれたというよりも、必要最小限の土木工事にとどめている印象でした」とのことです。つまり、松ヶ崎城は豪族などの居城ではなく、何らかの軍事的な目的で築かれたとしても、箕輪城のような「要塞」でもない城郭ということになります。



＜松ヶ崎城跡の堀を歩く＞

また単純な城郭と思われがちな幸谷城館跡に土壘・堀の折ひずみ、堀底施設などの工夫があったことは意外です。

前記の高城氏の築城技術などは「その家に保有された独自の技術で、極論すれば門外不出の最高機密と思われがちですが、領主権力に縛られず、技術者は自由に活動したとする考え方もあります。ただ、独自の技術は別としても、よく使った、好んだ技術はあったことでしょう。その分布を把握することは、支配地域あるいはその影響の範囲を知る手掛かりともなります。さらに、使われた時期がわかれれば、その城館の年代や機能を知ることができるかもしれません」とのこと。

考古学に詳しくなくても、あるいは城郭ファンでなくても、わかりやすいお話で、大変面白く、興味深

い内容だったと思います。

県や神奈川県からの参加者
もいました。

大きな合戦があった訳でも
ないでしょう。一日に何
箇所も城郭をめぐるよう
な人からみれば、あまり特徴
のないお城と思われるかも
しません。

3. エンディングは「古城」合唱

今回のエンディングは、
再度有吉さんにご登壇願
い、皆で「古城」の合唱を
行いました。三橋美智也
が歌った有名な歌ですが、
最近も別の歌手が歌ってい
ます。

講演会では、皆熱心に聞
いており、中には結構城郭
について詳しそうな方から
の質問もありました。

今回の参加者では柏市議
会議員の岡田智佳氏のご来
場があり、ご挨拶をいただ
きました。また柏市教育
委員会の方もご来場いただ
きました。参加者は47
名でしたが、遠方では埼玉



＜講演会の様子＞

合唱した「古城」の歌
は、一説には石川県の七尾
城がモデルと言われます
が、実際にはモデルはない
ようです。松ヶ崎城には
「古城」の歌詞にあるよう
な石垣はないですし、矢弾
も飛んでこなかったかもし
れません。松ヶ崎城は、
築城以来約500年、往時
を偲ばせる遺構が残ったお
城です。有名な武将の居
城でもなく、そこを舞台に

しかし、松ヶ崎城を守る
立場からすれば、長い歴史
のなかで偶然が重なって保
存してきた貴重な文化財
です。これからも次世代
に受け継いでいかねばなら
ないと思います。



2024年度総会での議決について

2024年4月28日(日)11時より、パレット柏ミーティングルームCで行われた当
会総会において、第1号議案：2023年度事業報告、同決算報告の件、第2号議案：
2024年度事業計画、同予算承認の件、第3号議案 会則改定の件(当会事務所住所を個
人宅記載から「別に定める」と改定)、第4号議案：役員選出の件(会長以下現体制を維
持)に関して、全て議案通りに可決されました。

特に第2号議案に関し、従来の歴史講座開催、地域密着活動の活性化など以外に、創立
25周年記念行事の開催を予定し、松ヶ崎城祭りも類似イベントの動向を見ながら開催方
法を工夫し、開催する方向で検討するとしました。

※ 創立25周年記念行事とは、7月14日の講演とコンサートの集いのことです



自宅にあった縄文土器のかけら

森 伸之

1. 自宅の裏庭で縄文土器 「発見」

自分の一家は、昭和35年(1960)の暮れに東京都内から船橋市内に引っ越ししてきた。都内も最初は世田谷区だったが、後に江戸川区に越した。船橋に引っ越しす前に住んでいた江戸川区の家は、戦前に建ち戦災を免れた古い家で、幼い自分は畳の上で遊んでいたのをかすかに記憶している。そこが茶室であったことは、一昨年他界した父の遺品写真からわかった。総武線を走る機関車が江戸川の鉄橋で汽笛を鳴らすのを見て喜んでいたそうだが、それは覚えていない。

最初は新築だった船橋の一戸建ての家も一度増築、さらに一から建て替えた。昔は庭に柿の木があって、登下校の子供が登るので困ったが、今は別の木が植えられている。その船橋市内の家には長く住んでいた

が、自分は就職、転勤、結婚などで転居が多かった。

最近母も亡くなって家を空き家にしておくわけにもいかないので、住んでいた船橋市内のマンションから、父の死後相続した元々の家に妻とこの秋に戻ることになった。その前に元々の家のリフォームを行っていたが、それが一段落したころ、裏庭を整理しようとしたとき、植木鉢の中に瓦の破片のようなものがあるに気付いた。

かけらであった。土器片以外に一つ白くなつた貝殻もあった。それらは以前は箱にしまって保管していたが、自分が成人して家から離れたうちにどこかに行っていた。全く驚いた。なぜ裏庭にあったのかは不明であるが、土器片のなかに小さな破片を割れ目にそって接着したものがあり、それには覚えがあった。

2. 土器のかけらを手にし て若き日を思い出す



＜1970年当時の筆者の母校の中学校：手前は畠＞

※船橋市HPより

取り出してみると、自分が53年前中学生であった頃に畠で拾った縄文土器の

中学生の頃に拾った土器片を手にして、当時のことを思い出した。中学生の自分は総じて平凡であったが、絵画が好きな割に美術部に入らず、人が絵を描くのを見ているだけ、ぬかるみにはまつた車を押す人助けを友人として校長から褒められた翌日に、別件で職員室に呼び出されるという変なところもあった。ただ理科の実験や生物の観察

が好きで、東京の中野に住んでいた従兄の古い科学雑誌を貰い受け、読み耽ったりしていた。

自分が通っていた中学校は、自宅のある町名を冠しているのに隣の地区にあって少し遠く、南側一帯は畠、北は田んぼという、のどかな場所にあり、通学路も畠や田んぼのそばを通りていた。学校の南側は一面畠、その中の未舗装の道が通学路、その道沿いに土器のかけらが落ちていた。

もちろん耕地に足を踏み入れることはなかったが、ある日道沿いの土器片を拾っていたところ、農作業をしていた年配の女性から、「何をしているの?」と聞かれ、「土器を拾っています」と答えると、「持って帰って良いよ」とのことであった。その女性がいないうちも、自分は調子に乗って土器片を拾い、自宅に持ち帰った。考古学の本を読み、知識が増えるのも面白かった。特に放射性炭素の減り具合から遺物の年代を推定する放射線元素測定法というのがあると知り、科学的な方法はそこまで応用できるのか、と驚いた。自分の拾った土器片

もいつ頃のものか知りたいと思いつつ、土器片を入れた箱は宝箱のように感じた。

中2ともなると、高校受験をどうしても意識せざるを得ない。自分は母と親しい女性が自宅に来て、高校は県立F高校が良いとうのを聞いていた。F高は難しいらしいが何が良いのかはよくわからず、ただF高なら同じ船橋市内で自宅から歩いて行ける場所でもあり、そのまま志望校は県立F高校にした。

しかし縄文土器のかけらを拾ったり、本で考古学のことを調べたりしているうちに、学校の成績が少し下がってしまった。担任の日頃は温厚なN先生から「君は二言目にはF高に行くと言っているが、それだけの努力をしているのか。考古学もいいけれど、今ままでは落ちるかもしれない」と言われ少々こたえた。その後成績は回復し、県立F高校の理数科に入学できた。

理数科は普通科にはない数学Cまであり、プログラム電卓で複雑な算式を打ち込んで計算させるなど新しい授業もあった。入学し

たてなのに自発的に大学受験の問題を解いている者も少なくなかった。1、2年生の頃に歴史のクラブに所属、夏見大塚遺跡の発掘の手伝いにも参加した。やがて大学受験に直面したが、暗記が苦手で化学の元素記号などが覚えられなかったのがたたり、遂に大学は理系ではなく国立文系を志願することになった。

学部生として大学には2回入学し、入学式にも2度出たが、卒業したのは東京の西にある旧三商大のH大の社会学部だけである。



〈大学の講堂の前で〉

当時も、寮にいた時期を除けば、遠距離通学で自宅にいたが、しまってある土器のことは忘れていた。

大学では日本近現代政治史のゼミに所属、サークルでは主に経済史を勉強した。

院生から大学院に来ないかと誘われたが、結局大学卒業後は鉄鋼メーカーに就職した。当初経理部門に

いたものの、途中からコンピュータシステム部門に異動となり、事務系なのにほぼ技術屋扱いで42年間の会社生活を送った。会社生活の最後の年に、京都の大学の大学院に入学、65歳目前で院生となり社会学を専攻、今に至る。

3. 土器片を博物館に寄贈

さて、自宅で見つかった土器片であるが、自分の手元にあっても仕方がないと考え、どこかに寄贈することにした。何か博物館などに寄贈しようとしても、収蔵スペースの関係からか、なかなか受け取ってもらえないという話もある。実際自分も花入れとして使っている江戸時代の木樋を引き取ってもらえないか、東京都内の博物館に聞いたことがあるが、「江戸期の木樋は結構残っているので…」と断られた。しかし、一応土器片の寄贈の話はすることにした。

船橋市飛ノ台史跡公園博物館に電話したところ、すぐに調整ができ、7月末に当時住んでいたマンションに近い船橋市郷土資料館までKさんという学芸員の方

が来てくれて、土器片の受け渡しができた。

そのKさんによれば、自分が土器片を拾った中学校の南側の畠は、中野木台遺跡の範囲内であり、土器片29点は全て縄文中期のもの、貝殻はサルボウガイで、これも同じころのものだろうとのことであった。

本来であれば、発掘などで出てきたものは、出土した場所や状況の詳細が記録されるべきであるが、その土器片はろくな知識のない中学生当時の自分が拾って家に置いていただけであった。また、その土器片自体、見たところ特別なものでもなさそうで、それが正式に博物館の所蔵になったのは、ともあれ喜ばしいことである。

自分が土器片を拾った頃は、中学校の南側の畠の中に、一本道のように未舗装の道が通っていたが、見せてもらった今の地図では住宅が建ち並び、道も複数あった（その後、実際に現地に見に行つたが、畠だった所は住宅地になり、道も立派に舗装されていて、どこで土器片を拾ったのか、見当もつかないようになっていた）。こうも現場の状

況が変わった場合、遺物の出土地点など、どのようにして把握するのだろう。GPSの位置情報のようなものを使うのだろうか。



＜寄贈先となった船橋市飛ノ台史跡公園博物館＞

なお、Kさんより8月10日の中野木台遺跡第25次調査地点遺跡説明会のことを聞き、参加することにした。

4. 遺跡説明会で

出身中学周辺には、今はあまり来ることはない。会場に行く途中、かつての通学路を歩いたが、宅地化が進み、昔とだいぶ変わっていた。



＜遺跡の現地説明会へ＞

遺跡説明会の場所に開始前に着いたら、既に何人か見学している人がいた。常連の人もいたようだ。奥にテントがあり、パネルや出土物が展示されていたが、その中に自分が拾った土器片と貝殻が箱に入っていた。それは触ってもいいとされ、実際に来場者で自分が拾った土器片を手に取る人もいた。



<テントにはパネルも掲示>



<出土品の数々>



<自分が拾った縄文土器片>

説明会が開始されると、メガホンを持った若い男性職員が、来た人に向かって説明を始めた。発掘現場には、土坑などの穴がたくさんあった。



<続々と見学者が来場>



<赤い焼け色がついた炉穴>

<炉穴の想像図>
※今回の説明会で示された資料より

面白いのは、約8,000年から約9,000年前の炉穴で、それが住居の外にあったこと。竪穴式住居は住居内に炉があるイメージがあるが、縄文でも早期には、炉は住居外に作ったそうだ。縄文前期くらいになると、炉は住居の中に作られるが、縄文早期には屋内で火や煙をうまく扱えなかったのだろうか。炉穴は屋外で調理を行う場所である。炉穴から分岐するように掘った煙道という小さい穴がある場合、そこに土器を差し込んで、炉穴に人が入って煮炊きをしたり、肉を吊るして燻製を作っていたようだ。

なお自分が拾った縄文中期の土器片は、年代には若干幅があり、新しくても約4,500年前、古いのは5,000年以上前らしい。

実は元々の家以外に、父は古家付きの隣地を所有しており、そちらは自分の親族が相続した。そこにあった主要な植木は元々の家の敷地に移植して古家は解体、更地にした。そちらに今回の土器片が置かれていたら、おそらく気づかず失われていただろう。

50年以上前に拾い、忘れかけていた縄文土器のかけらが、日の目をみて安堵した次第である。



地域史の窓

酉の市のルーツは千葉県？

毎年11月になると、「お酉様」とも呼ばれる酉の市が、浅草・鷺（おおとり）神社など各所で行われます。その周辺には熊手を持つ人が行きかい、屋台では威勢のいい三本締めの掛け声が聞かれます。

前記の鷺神社のお隣に鷺在山長國寺というお寺があり、「酉の寺」として知られます。こちらでも屋台の熊手はあるのですが、お寺から熊手のお守りが授与されます。長國寺は寛永

7年(1630)に今の千葉県茂原市の長國山鷺山寺（じゅせんじ）第13世・日乾上人によって開山されました。浅草酉の市の発祥の寺といわれています。

この長國寺には、前記の長國山鷺山寺（法華宗）から鷺妙見大菩薩（鷺大明神）が明和8年(1771)に勧請されました。鷺妙見大菩薩の開帳日の市が、酉の市の元とすれば、千葉県がルーツということになるでしょう。



＜善男善女であふれる境内＞



鷺に乗った妙見菩薩をかた
どつた鷺妙見かつこめ守り

お知らせ

＜第11回松ヶ崎城祭りについて＞

日時： 2024年11月24日（日） 10時より15時頃まで

場所： 松ヶ崎城跡 北柏駅北口から北西へ約500m徒歩10分

または北柏駅南口からバス北柏ライフタウン循環「竹ノ台」下車、徒歩3分

【午前】見学会 松ヶ崎城跡と、その周辺をめぐります。

予定 10時集合・出発、12時頃まで（集合場所：松ヶ崎城跡東側台地中段）

【午後】お城クイズ・お楽しみ会 クイズに答えて景品をゲットしよう。

城跡も少し見学して…

予定 13時半～15時頃（場所：松ヶ崎城跡東側カツラの木周辺）



＜会報記事募集＞

猛暑が去り、すっかり秋らしくなりました。史跡めぐり等のご報告、個人研究の成果発表、写真やイラスト、エッセイなど、会報記事の投稿をお待ちしております。次回の会報は、来春発行を予定しています。投稿は、メールはinfo@matsugasakijo.netまで。

手賀沼が海だったころ

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報 第51号 2024.11.11

編集・発行人：森 伸之

年会費2千円 振込先：千葉銀行 柏支店 普通 口座番号3461475